




審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2842 号	氏名	田尻 守祐
審査担当者	主査	大島 孝一	(印) 
	副主査	石井 由人	(印) 
	副主査	溝口 光志	(印) 
主論文題目： Serum Level of Periostin Can Predict Long-term Outcome of Idiopathic Pulmonary Fibrosis (血清ペリオスチン値は、IPF の線維化病変の拡大、長期予後の予測因子である)			

審査結果の要旨 (意見)

今回の研究は、特発性肺線維症 (IPF) にて、KL-6, SP-D, SP-A 以外に確立したバイオマーカー以外に、新規の細胞外マトリックス (ECM) 蛋白であるペリオスチンが特発性肺線維症のバイオマーカーとなることを示した論文で、また、特発性肺線維症の肺機能 (VC, DLco) と関連するとして過去の報告よりさらに、今回は、6 か月間の honeycombing スコアの増加率と正相関を認めたことより、臨床的にも非常に有用であることが示された研究である。今回の研究は、今後の特発性肺線維症の診断、経過観察での有用性の可能性を示唆するものである。審査にあたり、今後の展開、また研究内容に対する質問にも的確に回答が得られた。この論文は十分に学位に値するものと考えられた。

論文要旨

特発性肺線維症 (IPF) には、KL-6, SP-D, SP-A 以外に確立したバイオマーカーが存在しない。我々は新規の細胞外マトリックス (ECM) 蛋白であるペリオスチンが IPF の肺機能 (VC, DLco) と関連することを過去に報告した。そこでペリオスチンが長期予後の規定因子であるという仮説を立て、長期観察による研究を行い、更に血清ペリオスチンと HRCT スコアとの相関解析を行った。長期観察できた 29 人の IPF 患者を後方視的に解析した。血清ペリオスチン値は、ベースラインの HRCT スコアの各項目との相関は認めなかったが、6 か月間の honeycombing スコアの増加率と正相関を認めた。従って、ペリオスチンが画像的な線維化病変の拡大の予測因子となり得ることが証明された。また log-rank test にて解析を行った結果、ペリオスチンは 5 年間の overall survival (OS), time-to-event (TTE) とともに予後規定因子であった。以上より、IPF において血清ペリオスチンは病状悪化の予測に寄与するバイオマーカーの可能性がある。